

## 企画シンポジウム（11月28日）に対して寄せられたご意見

（当日の発言および通信の要約）

- 1) 児玉氏のパネルでは、研究の段階と開発の段階が時系列的に接合され、製品化・実用化へ繋がるというモデルが示され、核融合研究はこの接合期にあること、開発段階の研究の担い手がどこなのかが問題であることが指摘された。これに対して、核融合研究においては、研究の段階と開発の段階が融合しているとのコメントがあった。この点は、核融合という人類未踏領域への挑戦の著しい特徴であり、社会に対してもよく説明する必要がある。
- 2) アピールの起草にも、将来の研究を担う若手の意見を多く反映させる必要があるとの指摘があった。とくに若手の研究者にとって、核融合という長期プロジェクトのロードマップを明示することの必要性が指摘された。それぞれの開発目標や研究課題について、どのような規模の研究組織が必要であるのか、またそれらの相互連携を組織化するシステムのあり方について、学会から具体的な提言を行うべきである。
- 3) 核融合研究が、学術研究として存在感を持つためには、他分野と共通性があるテーマを明示することと同時に、それらにおいて核融合分野の研究が独特な成果をあげ、他分野を牽引する力を持つ必要がある。学術的なテーマを俯瞰する「地図（あるいは鳥瞰図ないし曼荼羅）」を学会が中心となって提示する努力が必要である。
- 4) このアピールは、(1)学会員への、核融合に関わる学術の自己認識を促すためのアピール；(2)学会がどのように学術振興のために活動すべきかの方針を提言；(3)学会から、政策決定機関などへ、学術振興のための政策を提言；という3要

素を含んでいるように思われるが、目的を最初に明示する必要がある。

- 5) 抽象的な記述（戦略とコミュニケーション，あるいは還元と総合といった対立項の措定）について，起草者や会員の合意が取れている必要がある。また，異なる問題の捉え方もあるので，それらを提言に盛り込む必要がある。
- 6) 鳥瞰的に学術研究内容の全体像を述べるか，ITER の成功のために必要不可欠と思われるものを数え上げるか，など「総合性」が求められる。これは，本提言に続く学会活動の中から生み出してゆきたいが，そのことを明記する必要がある。
- 7) 本アピールの目指すところについて，学会はかねてから企画・活動しているので，それらを紹介しておく必要がある。